WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会

No.67

2008. 12. 26　発行

野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.67 目次

会長挨拶　野性鳥獣と環境問題に思うこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
東京港野鳥公園油汚染水鳥救護講習会開催案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
環境省　動物愛護管理功労賞大臣表彰について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4-5
野生動物救護獣医師協会講習会（四ツ谷）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6-7
第29回動物臨床医学会年次大会（大阪）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8-9
寄付のご案内・総会案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
油等汚染事故対策水鳥救護研修案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
高松での講習会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
札幌のカラスに鳥ポックス症流行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
「第5回野生動物保護セミナーin関東」講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
神奈川県野生動物リハビリテーター“ロゴマーク”の紹介・・・・・・・・・・・・・・・・14
08年　カラス調査　中間報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
寄付のお礼・事務局日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

野生鳥獣と環境問題に思うこと

特定非営利活動法人
野生動物救護獣医師協会
会 長　**新妻　勲夫**

日本国そして世界は地球レベルで温暖化が進み、生態系に影響を与えている。「野生鳥獣の繁殖時期の早まり、植物においても異変が起こっている。ソメイヨシノの開花時期が東京では1953年以降、5年間で平均5.3日早くなっている」と私が司会を務めた動臨研での樋口先生が講演で話しておられた。

WRVとしては1月に発生したお隣韓国での油事故、流出した油に生息環境を脅かされた鳥類、油汚染鳥の救出に、野村先生、馬場先生が韓国の油流出事故現場に即時向かい、油汚染鳥の専門家の一員として洗浄に協力をする。2月には馬場先生と須田先生が洗浄方法等の指導を行った。これも小さなことであるが、国際協力と自然環境に貢献したことと思う。

ヒナを拾わないで!!キャンペーンでも、なぜヒナを拾ってはいけないのかについて子供たちの疑問に答えることで、将来子供の情操教育として有用である。また、野生動物の救護、治療、管理、リハビリ、放鳥等の講師としての活動はもとより、行政と各県の獣医師会との連携のもと、現地での油汚染鳥の救護、洗浄方法での研修を実施して大変良い成果を上げている。

野生動物について勉強している大学生そして行政の方々も油汚染鳥救護実習に際して、一度も鳥に触れたことのない受講生も多数いる。今までに神奈川県、大阪府、福島県、宮崎県、香川県、徳島県、三重県、岐阜県、北海道で行政、獣医師会から協力や講師の派遣の依頼を受けているが、行政と現場双方の連携がとれている地域とそうでない地域がある。WRVが環境省の現地研修に赴いた時、やはり連携がとれている地域の地区では研修をやりやすい。本年度の現地研修は静岡県での開催を予定している。これからも現地研修に協力していただける地域が拡大することを願うと同時に、カルテ集計の正確さを期するためにも協力体制の強化に努力したいと思っている。

日頃の野生鳥獣の救護活動については、東京都および他の都道府県からの有志で協力の得られた先生方から、救護についての原因、治療、管理、リハビリの方法についてカルテの形式で集計している。動物臨床医学会年次大会等においても、近年皆様に知ってほしい演題を取り上げて講演を依頼している。今年度、主に取り上げた問題は地球温暖化の問題そして鳥インフルエンザに対する対処の方法等の問題である。WRVはカルテ集計を纏め上げて口演発表も行っている。

来年度においても本年度行ってきた行事、口演、啓蒙活動に加えて、各大手企業に協賛、助成をお願いして鳥類の羽毛のミネラル分析を行い、環境汚染問題について考えてみたい。また、東京大学樋口先生に協力してGPS発信機を搭載した鳥類の飛行ルートを研究することによって、鳥インフルエンザの伝播についても究明出来ればと思っている。その他に講演内容の統一化に向けて野鳥救護教本のテキスト作りの完成を望むところである。

これからの社会を形成していく幼児、若者たちの未来の環境問題に少しでも貢献できればと祈念しております。

「東京港野鳥公園油汚染水鳥救護講習会」開催報告

ＷＲＶ事務局　箕輪　多津男

去る９月２８日（日）、東京港野鳥公園にて、例年の通り油汚染水鳥救護に関わる講習会を開催いたしました。今回は当初、受講希望者がかなり少なかったようでしたが、最終的には１６名の方に参加をいただき、心配された天候にも恵まれ、順調にプログラムを進めることができました。

当日はまず、ＷＲＶの新妻勲夫会長に司会をお願いし、講習会の主旨を説明いただいた後、東京港野鳥公園の久保淳園長と(財)日本野鳥の会の金井 裕チーフレンジャーより、それぞれご挨拶を頂戴いたしました。

講習風景

続いて講義に移り、まず、ＷＲＶの野村治理事より「油について」というタイトルでお話しいただきました。油の性質や油汚染事故時の水鳥等への被害発生のメカニズム、あるいは様々な流出油の防除法など、多岐に渡る内容を分かりやすく解説していただきました。

次に私のほうから、「水鳥について」の講義をさせていただきました。特に油汚染事故の際に被害に遭いやすい水鳥を中心に、その形態的特徴や、それぞれの種の生態等について、ポイントをかいつまんでお話しいたしました。

そしてＷＲＶの皆川康雄理事より、「油汚染水鳥救護について」の講義をしていただきました。油汚染鳥の救護に関して、被害鳥の保護・収容からはじまり、救護施設への移送、施設における受け入れと処置および治療、その後の油の洗浄と乾燥、さらにリハビリテーションを経て放鳥（野生復帰）に至る、一連の作業工程とそれぞれの段階で必要な技術と心構え等について、順を追って具体的に解説していただきました。

講義を終えた後、場所をネイチャーセンターから、管理等の横にある水場に移して、今度は「水鳥の洗浄実習」へとプログラムを進めました。

実習を始める前に、まずＷＲＶの馬場国敏副会長より、具体的な作業に関する段取りおよび注意事項等に関する説明をしていただきました。特に、作業に当たって事前に準備する必要のある資機材や、作業者が身に着けるべき装具等について、分かりやすお話しをいただきました。

その後、３班に分かれて水鳥洗浄の作業実習に入り、新妻会長、馬場副会長、野村理事、皆川理事に、それぞれ実践指導をお願いいたしました。アイガモを使った実習とは言え、生まれて初めて鳥に触ったという参加者も多かったようで、皆、熱心に作業に取り組んでおりました。ゴミ袋を利用した作業着の製作から始まり、鳥の体重や体温の測定、胸部の触診による栄養状態の確認、聴診、洗剤を使用した洗浄作業、そして最終的な乾燥と状態の再確認に至る、一通りの工程に身をもって取り組まれたことは、参加者各人にとって貴重な体験になったものと推察いたしております。

集合写真

講習の最後に、東京港グリーンボランティアの八木雄二代表から閉会のご挨拶をいただき、無事終了となりました。

本講習会につきましては、関係者の間で今後も継続していく意向が確認されておりますので、来年以降もより有意義なものとなるよう検討していければと考えております。

終わりに、今回の講習会の開催にあたり準備も含めてご協力いただいた関係各位と、当日、ボランティアとして会場に駆けつけてくださいましたＷＲＶ会員の土屋彰さんに、改めて感謝の意を表したいと思います。

環境省　功労賞を受賞して

副会長　馬場　國敏

このたび、平成 20 年 9 月 22 日環境省にて光栄にも動物愛護・管理功労賞を受賞いたしました。この受賞は WRV 会員、関係者皆様の賜物と思っております。

本年度の受賞者は、慶応大学の前島先生、東京都の獣医師青木先生等でした。受賞を目標として今日まで活動してきた訳ではありませんが、今までの犠牲的動物愛護活動、野生動物救護活動に対しての受賞かと思っています。受賞資格が有るのかは分りませんが、WRV の代表と云う気持ちでお受けいたしました。

1991 年サウジアラビア･ペルシャ湾での戦争勃発。有史以来の「環境」を「武器」とした自然生命を冒涜した初の戦争でした。一番の被害者は、戦争とは関係の無い野生生物達だったのです。特にオイル流出による水鳥たちの被害は、推定 15 万羽と言われています。

創立準備中の WRV はいち早くこの救出に関心をもち、私に協力し援助してくれました。私が代表として環境省職員、鳥類保護連盟職員と共に、2 ヶ月間協力活動に赴き、世界貢献できたのです。この「世界貢献」という言葉はこの年から流行したのです。

その後も各方面で、野生動物、飼育動物の救護活動に関わって来ました。特に阪神大震災は私にとっても大変苦労したものでした。WRV 会員としては野生動物外なので、他の団体の会員として協力という形をとりました。私の個人責任で協力活動をし、立ち上げから終息まで関係したのです。日本国内では、野生動物及び飼育動物の集団救護や集団飼育の経験者が私一人でしたので、責任上、被災者の皆様と一緒に飼育動物の救護にあたりました。WRV のほとんどの方が、野生動物の救護を通してよりよい社会、人間形成を最終目的とし考える崇高な人たちです。WRV がバックアップしてくれたことで野生動物以外にも分け隔てなく活動できました。

1997 年、WRV が本領を発揮する大事故が発生し、WRV 一丸となって救護活動を行いました。それが「ナホトカ号油流出事故」です。私もいち早く現地に飛び、地元ボランティアの指揮を喜んで執らせていただきました。この流出事故が、国内に於いての野生動物ボランティア元年ではないでしょうか？

最も新しい救護活動では、韓国忠清南道沖のタンカー事故です。韓国に於いては未経験の出来事で、WRV は非常に感謝されました。

この様な野生動物、飼育動物の救護活動は本当に大変ですが、この受賞を機に、より一層がんばって参りたいと思っております。

写真：平成 20 年度
動物愛護管理功労賞表彰

馬場　國敏先生　経歴

昭和 23 年 5 月 22 日生まれ

学歴

昭和 42 年 3 月　　筑紫中央高校卒業
昭和 46 年 3 月　　麻布獣医科大学卒業

経歴

昭和 48 年 4 月　　川崎市にて馬場動物病院開業
昭和 63 年　　川崎飼鳥診療愛護センター開設
平成 3 年　　日本動物愛護協会常任理事
平成 3 年 2 月　　オーストラリア　ボランティア　アザラシ救出
平成 3 年 4～6 月　サウジアラビア　野生生物救出チーム環境庁派遣
平成 4 年 1 月　　シチズン･オブ･ザ･イヤー受賞
平成 4 年 12 月　　スペイン　タンカー事故　水鳥救出
平成 5 年 1 月　　シェットランド島　タンカー事故
平成 5 年 2 月　　苫小牧　タンカー事故
平成 6 年 8 月　　南アフリカ（ケープタウン）　ペンギン救出
平成 7 年 1 月　　阪神大震災　復興企画参加
平成 9 年 1 月　　日本海ナホトカ号油流出事故
平成 10 年 4 月　　野生動物ボランティアセンター
　　(川崎野生動物救護・自然環境協会）開設
平成 10 年 8 月　　カリフォルニア　野生動物行政管理　視察
平成 12 年 1 月　フランス　タンカー事故
平成 12 年 4 月　有珠山　被災動物救護企画参加
平成 13 年 1 月　ガラパゴス　タンカー事故
平成 13 年 4 月　三宅島被災動物救護センター相談役
平成 15 年 4 月　日本野生動物医学会理事
平成 18 年 2 月　対馬沖オイル流出　参加
平成 19 年 12 月　韓国忠清南道沖タンカー事故　協力と視察
平成 20 年 1 月　韓国忠清南道沖タンカー事故後、「冬の学校」講師

野生動物救護獣医師協会講習会（四ツ谷）

―――野生動物救護の現場から―――

WRV 会長　新妻　勲夫

平成 20 年 9 月 14 日（日）に主婦会館プラザエフにおいて WRV 東京都支部担当の講習会が開催され、約 70 名（獣医師、ボランティア会員、鳥獣保護員、行政関連）の参加者であった。演題は 4 題で、講師はいずれも WRV 会員の 4 名により下記の内容について講演が行われた。

新妻勲夫　会長

佐藤志伸
東京都支部副支部長

司会は、佐藤志伸東京都支部副支部長であり、新妻勲夫会長より本日のテーマの解説と挨拶の後、講演に入った。

演題 1 は、「猛禽類の野外調査と獣医学研究、野鳥の生態調査から鉛中毒、感染症等調査」について、猛禽類医学研究所代表斎藤慶輔先生の講演であった。先生は環境省・釧路湿原野生生物保護センターにおいて、長年にわたり、シマフクロウ、オオワシ、オジロワシを始めとする、希少種の保護増殖活動や獣医学研究に携わっている。

齋藤　慶輔先生

銃弾による鉛中毒：ハンターがエゾシカを射撃し、銃弾に倒れたエゾシカの体内に鉛ライフル弾が残ることになることにより、ワシ類はじめこれを食した野生鳥獣が鉛中毒となり、命を落とすことになる。これを防ぐためには、銃弾を鉛でなく銅弾を用いるのが良いとのこと。

油流出による汚染事故：油流出事故において、被害にあった水鳥を救出するためには、油汚染事故の現場に急行して救出活動をしなければならない。油汚染鳥の救出は、身体の一般検査に始まり、強制給餌、油で汚染された部位の洗浄作業、リハビリを経て無事放鳥ということになるとのこと。

北海道における希少猛禽類の感電事故とその対策：エコ対策の一環として風を利用した風力発電が盛んになってきた。その結果として、鳥類の衝突事故が絶えない。これを防止するためにプロペラに色をつけたり、模様を付けたりしているが、なかなかうまくいかないのが現状である。高圧線には数万ボルトの電圧がかかっており、感電事故が多発しているのは 6 万 6 千ボルトの送電鉄塔である。鳥類が止まった時に電流がリークすることがあり、これにより高電流が流れ、鳥類は死に至るとのこと。

鳥類の感染症：地球温暖化の進行が鳥類の感染症を増加させ、それに伴い我々人間へのウイルスの伝播、さらには鳥類の飛行ルートに及ぼす感染症の拡大など多大なる影響が心配であるとのこと。

演題 2 は、「鳥インフルエンザ対応、鳥インフルエンザの可能性がある鳥類の取り扱いとその対策」について、いのかしら公園動物病院院長、WRV 理事石橋徹先生であった。

先生は野生鳥獣の診療を始めとする爬虫類の診療も得意としている。

鳥インフルエンザの原因となる A 型のウイルスのうち、感染力の強い H5N1 について、プレパンデミックワクチンの必要性を訴えている。この高病原性鳥インフルエンザウイルスは極めて感染力が強く、罹患した人から人へと感染した場合、その地域は壊滅状態になるであろうと言われている。これらを防ぐ手段は、現在のところタミフルに頼らざるを得ない。プレパンデミックワクチンを開発するには、その地域での発生にともなうワクチンでなければならない。なぜならば、このウイルスは変異型であるため、他の地域での発生に伴うワクチンの効果が期待出来ないからであるとのこと。

石橋　徹先生

演題 3 は、「ミズナギドリの救護、荒天候で飛ばされ保護された海鳥の血液検査と飼育・放鳥」について、自然環境アカデミー専務理事兼事務局長野村　亮先生であった。先生は、鳥類標識調査員（バンダー）、鳥獣保護員としても活躍されている。

野村　亮先生

ハシボソミズナギドリの平均体重は 270g であり、血液検査の結果は、救護して 3 日目の 1 例で PCV 17%、（35～45%）、TP2.3g/dl、（3～5g/dl）、0.1ｇ/dl（2g/dl）以上という結果であった。なお、（　）内の数値は鳥類の平均を示している。捕食がうまくいかず、削そうが著しく、やっと飛行しているため強風にあおられて陸地の奥に飛来したものと思われる。食欲も出てき、体重、PCV、TP の上昇を確認してから野外に放鳥されるとのこと。

演題 4 は、「都道府県傷病鳥獣救護等のアンケート調査、都道府県の対応アンケート調査・報告」について、須田動物病院院長、WRV 元会長須田沖夫先生であった。

須田　沖夫先生

先生は、1991 年に WRV 設立に尽力した理事で、現在も会の運営に精力的に活動されている。

都道府県でのアンケート調査は、各地区にアンケート用紙を送付して回答してもらう方式を取ったが、47 都道府県うち 36 都道府県のみしか協力が得られず、約 76%の回答率であった。この中で興味深いのは保護動物 100 頭以下から 2.000 頭に近い地域もあるということである。保護、管理、治療費においてもかなりの差が見られる。1 件当たり数百円から 1 万円弱である。地域差そして設備等の差があるものの、ある程度は平均価格に近いものであって欲しい。回答のあった都道府県での鳥獣保護センターの保有率は、54%で約半数である。ちなみに東京地区には鳥獣保護センターはないが、いかにして保護センターを東京に作るかについて、行政等に掛け合っているのが現状であるとのこと。

本講習会には、鳥獣保護員の方々が多数参加下さったことにつきまして、皆様と共に感謝申し上げます。

第 29 回動物臨床医学会年次大会（大阪）

――― 一般口演・市民公開野生動物フォーラム ―――

WRV 会長　新妻　勲夫

平成 20 年 11 月 15 日（土）～16 日（日）にグランキューブ大阪（大阪国際会議場）において第 29 回動物臨床医学会年次大会が開催され、両日合わせて延べ 4.500 名（獣医師、学生、VT で 3.000 名、出展企業関係者 1.500 名）の参加があった。野生動物救護獣医師協会（ＷＲＶ）として、一般口演として、理事の須田沖夫先生が野生鳥獣保護の実情調査～都道府県の傷病野生鳥獣への取り組みアンケート調査～と、東京都傷病野生動物の救護の推移--1991 年～2007 年のカルテ集計---について発表した。

須田沖夫先生

都道府県でのアンケート調査は、各地区にアンケート用紙を送付して回答してもらうという方式を取り、47 都道府県うち 36 都道府県の協力が得られた。約 76%の回答率である。この中で興味深いのは保護動物 100 頭以下から 2.000 頭に近い地域もあるということである。保護、管理、治療費においてもかなりの差が見られる。1 件当たり数百円から 1 万円弱である。地域差そして設備等の差があるものの、ある程度は平均価格に近いものであって欲しい。

発表後の質問タイムでは、某保健所職員からは、今後の救護、管理等の大変に参考になりました。とお褒めの言葉を頂き、演者も努力の甲斐があったものと思う。しかし、座長からの意見は、野生動物救護を獣医師がすることではなく、他のセクションが担当するべきであると、演者としては、多少困惑と同時に立腹していたように思われたが、今後の野生動物の救護、管理、治療に際しての必要性を冷静に説いた。

新妻勲夫先生

次の講演時間の都合により、須田理事の口演終了後に、市民公開野生動物フォーラムにおける司会の打ち合わせに向かった。このフォーラムは当協会が共催をしているもので、公演は、早急に対処をしなければならない地球規模での温暖化についての「地球温暖化と生きものや私たちのくらし」についての講演である。

演者は、東京大学大学院生命科学研究科教授・農学博士樋口広芳先生。先生は、生物多様性科学専攻であり、The Society for Conservation Biology-Asian Section　前会長でもある。

樋口広芳先生

地球温暖化現象は待ったなしで進んでおり、世界の地上気温はここ 100 年間で平均して 0.74℃上昇している。また、これからの 100 年間に、さらに 1.1～6.4℃上昇すると予想されているとのことである。現状を放映されたＴＶでも南極や北極の氷が急速に溶解し続けている環境下において、白熊、ペンギン等の野生生物の生息環境が脅かされていた。

そして、日本においても桜の開花時期が早やまったり、高山植物のゾーンが上昇しつつあり、蝶の行動にも変化が見られる。南から北へと移動しつつあり、鳥類の繁殖時期も早まっている。我々に脅威をもたらす感染症において、蚊が媒介するマラリア熱、デング熱、チクングニャ熱、西ナイル熱、日本脳炎等が猛威をふるう可能性が心配される。流氷の変化も日本では、琵琶湖に見られるように、流水の動きが緩慢となり全層循環の弱まりで、水生生物の生態系に被害をもたらしている。

講演終了後、フロアーから、この研究は長期に渡り根気のいる問題だが、これからも大いに頑張ってほしい旨、また、これら温暖化を少しでも和らげる方法はありますか等の質問、傷病鳥を保護した時、かなり南方系のものが増加したように思う等々の活発な議論がなされた。座長からは地球の温暖化が進みつつある現在、琵琶湖ですでに起こっている現象は、酸素の不足によって、水生生物が多大な被害を受けている。海流においても同様の現象が起こり海洋生物に対して環境破壊が起こり、その結果漁業等に及ぼす損害は計り知れないと思うとの意見もあった。

講演に際し皆様の大いなるご協力により、成功裏に終了出来たことに感謝申し上げます。

今後の演題につきましても皆様に鳥獣を含めての生活環境にお役に立つ講演の開催、共催を心がけていきたいと思っております。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【人災による傷病野生鳥獣の救護活動募金】のお願い

WRV では、傷病野生鳥獣救護活動を迅速に実行するため、人員の派遣費および資材の調達の募金活動を行っています。ご協力をお願いいたします。（救護活動用基金）

郵便局加入者番号：００１９０－５－７２２３６８
加入者名義：**WRV** 人災募金

＝＝＝
＝＝＝

平成 21 年度　総会開催案内

日時：平成 21 年 3 月 7 日（土）　18 時 30 分～

場所：立川市市民会館　第 4 会議室
東京都立川市錦町 3-3-20　TEL　042-526-1311
＊会場付近に駐車場が無いため、お車でのご来場はご遠慮ください。

議案：平成 20 年度事業報告および収支報告について
平成 20 年度監査報告
平成 21 年度事業計画案および収支予算案について
任期満了に伴う役員改選の件

平成 20 年度
第 3 回　油等汚染事故対策水鳥救護研修　案内

目的：油等汚染事故発生時に、野生鳥獣保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、油等に汚染された水鳥の救護等に関する共通認識と技術を習得することを目的とする。

日程：平成 21 年 2 月 5 日（木）、6 日（金）
内容：以下のような事項に基づき、講義および実習形式で研修を行う。

① 油等汚染事故における行政の役割対応
② 油等汚染事故の基礎知識
③ 日本の油等流出事故時の情報体制
④ 水鳥の生態
⑤ 油汚染鳥の保護法・治療法
⑥ 油汚染鳥の洗浄法
⑦ その他

＊鳥獣保護行政担当者向け

会場：環境省　水鳥救護研修センター研修室
〒191-0041　東京都日野市南平 2-35-2
TEL042-599-5050　FAX042-599-5051
HP http://www.hinocatv.ne.jp/~oiled-wb/

対象：国・地方自治体の鳥獣行政・防災行政担当職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、鳥獣保護員、動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

定員：1 回あたり 30 名（先着順）
＊申し込みは各開催日の 2 週間前まで。
ただし、定員になり次第締め切り。

参加費：無料（参加のための交通費、宿泊費等は自己負担）

申込用紙：水鳥救護研修センターHP よりダウンロードしてください。
申込先：環境省　水鳥救護研修センター
〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2
TEL　042-599-5050　FAX　042-599-5051

研修運営：特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会（ＷＲＶ）

平成 20 年度
環境省自然環境局請負事業
「油等汚染事故対策水鳥救護研修（現地研修）」
開催案内

主　催：環境省
（請負）特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会（ＷＲＶ）
後　援：静岡県、（社）静岡県獣医師会、
（財）日本野鳥の会、（財）日本野鳥の会静岡支部
日　時：平成 21 年 1 月 26 日（月）　10：00～17：00
（受付 9：40～）
会　場：静岡県男女共同参画センター
あざれあ　第 3 会議室
〒422-8063　静岡県静岡市駿河区馬渕 1-17-1
TEL 054-250-8107 FAX 054-255-2966
対　象：地方自治体職員、環境系ボランティア団体、獣医師等、地元団体等
定　員：60 名
参加費：無料（ただし、交通費は自己負担となります。）
< 目　的>
油汚染事故発生時に、野生鳥獣保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、油汚染事故への対策、水鳥救護の方法等に関する知識を身につけ、緊急時に備えた準備の必要性についての認識を深める。
講演（予定）：

1．静岡県の鳥獣保護について
2．静岡県の鳥について
3．油等汚染事故対応の事前準備
4．油について
5．油等汚染鳥の救護法

＊現地研修では実習はありません。

申し込み締め切り：平成 21 年 1 月 13 日（火）
ただし、定員に達し次第終了。
申込先：環境省水鳥救護研修センター
〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2
TEL: 042-599-5050　FAX: 042-599-5051

各研修の案内・申込用紙は水鳥救護研修センターHP または WRV ホームページよりダウンロードできます。

高松での講習会

理事　須田　沖夫

香川県環境森林部みどり保全課野生生物係より WRV に傷病野生動物救護に関しての講演依頼があった。WRV 理事会では香川県からは初めての依頼であり、総論的な内容ということで須田を選んだ。

講演は 2 部で、第 1 部では獣医師以外で実際に救護活動をしている人や興味をもっている人たちが対象であった。第 2 部では開業獣医師が主体で、県獣医師会が協力している。

9 月 23 日（火）秋分の日の早朝に出発し、高松空港では県職員の出迎えがあり、そのまま市内手前の栗林公園を案内してくれた。自然豊かで鳥類も多く、エナガやシジュウカラそしてアオサギもいる。池には魚類が多く、ナマズもみられた。カメも多く、種類もイシガメより外来種のアカミミガメが優勢であった。県でも外来種の対応に取り組んでいるが、職員が数名のため、十分な対応出来ていないとのこと。

講習会会場は高松駅の裏で、香川県獣医師会が動物愛護週間のイベントとして犬や猫の飼い方講習会やミルクやアイスクリームの試食会などを行なっていた。東京ではもう見られない犬猫の里親探しもしていた。仔犬のみでなく、成犬も何頭かいて、時代の変化を感じた。

香川県には県立の野生動物保護センターは無い。また、傷病野生動物救護は毎年 100 例強ある。さらに予算も毎年減っているので、その対応として数件の開業獣医師を指定病院として、その補助となるボランティアを養成することが今回の講習会の主な目的の様である。

保護動物が少ないので、病院は県内に数件確保できれば可能であり、ボランティアとしてリハビリテーターや里親を求めている。

第 1 部の講演では、20 数名の参加があり、数十年野生動物に関与している元ハンターの鳥獣保護員や、鳥類保護連盟の幹部もいらしていたが、多くの参加者は主婦などで、救護経験の無い人たちで、この中より十名位、協力者が出来れば良いと思われた。

第 2 部では、県獣医師会の協力もあり、20 数名の参加で、小動物開業者が多かった。中には県からすでに頼まれて野生動物の診察もしている数名の先生がいらしたが、多くが野生動物診療は未経験の様である。鳥インフルエンザなどの対応も気にしていた。

第 1 部、第 2 部とも同じスライドを用いたが、対象者も違うので、話す場と内容を変えて話した。WRV のカルテ集計、今年の都道府県のアンケート、そして症例（鳥類のみ）を加えて 90 分間講演を行った。スライドは以前、徳島県で使用したものをベースとした。

香川県では、今後の傷病野生動物保護行政の為に、都道府県に対して具体的なアンケート調査をしており、非保護動物の種類やボランティアの資格なども調査されていて、WRV にとっても非常に参考になるもので、動臨研の発表にも引用させていただいた。香川県に感謝しております。また、傷病野生動物救護、診療をする獣医師とリハビリテーター、里親養成が全国的に必要性が高まっているので、WRV として今後、どのようにそれらに関わってゆくかを早急に検討する必要があると実感した。

札幌のカラスに鳥ポックス症流行

WRV 理事　須田　沖夫

08 年 10 月 20 日の毎日新聞に鳥ポックス症の記事が写真入りで記載されました。札幌の市民団体「札幌カラス研究会」によると市内で 895 羽の内 198 羽に鳥ポックス病変を見つけた。

鳥ポックスは禽痘ウイルスと同意語であり、ポックスウイルス感染症で、鶏痘ウイルス、鳩痘ウイスル、七面鳥痘ウイルスなどの亜種がある。

鶏痘ウイルスは皮膚型と粘膜型が知られている。以前は夏に流行がみられたが、今は年間を通じて発生し、秋から冬は皮膚型が多く、冬は粘膜型が多く発生する。本症の感染は創傷感染で、健康な皮膚からは感染しない。また、蚊など吸血昆虫も伝播に関与する。

症状は、皮膚型の初期には顔や肉冠に灰白色の点としてみられ、帯赤色小丘疹となる。やがて帯黄色になり、大きくなると灰黄色となり、エンドウ豆大の結節になる。発痘数が多いと、互いに融合し、肉冠、肉垂などが変形する。眼瞼に、発症すると肥厚し、開眼に障害を起こすこともある。時に水痘もみられる。粘膜型は鼻カタルをおこし、元気、食欲をなくし削痩し、粘膜性の後に化膿性の排出物を嘴から流下させ、顔面が腫れる。呼吸、嚥下困難となり死亡することもある。混合型もみられる。

診断は臨床症状の他、ウイルス分離で確定する。飼育鶏では、消毒、蚊の侵入防止とワクチン接種であるが、野鳥においては集団化を防止し、鳥同士の接触防止が必要と思われるが現実的ではない。

この病気は人に感染しないので、関心は低いかもしれないが、ハワイでは希少種の鳥を絶滅させた例もある。また、札幌周辺は渡り鳥も多いので、この病気に感染した鳥が渡り鳥に感染させないか、集団内での鳥同士の接触があると発生率も上昇するので、希少種のガン・ツル・タカなどの集団に伝染することが心配である。鳥インフルエンザも同様である。

今回の札幌のカラス発症例について、地元の大学や環境省などに連絡や相談が無かった様なので、生物多様性の保全や野生動物保全に関する機関や団体の連携が無かったことが問題と思われる。

10 月 20 日には、毎日新聞を見て、フジテレビが鳥ポックス症を早速取材し、夕方には放送した。この時、WRV の須田として TV の内で一部インタビューを受けた。新妻会長も同席した。

「第 5 回野生動物保護セミナーin 関東」講演

理事　須田　沖夫

北海道中標津町の道東動物・自然研究所、道東野生動物保護セミナーを主催している森田正治先生のもとで、毎年行われている実習に参加した人たちを主体とした勉強会であり、すでに数百人の参加者がおり、学生はじめ、すでに現場で野生動物に関わっている獣医師も参加していた。皆川と須田は WRV 理事会の承認を得て、講師を受けた。

08 年 11 月 23 日麻布大学で保護セミナーが開催された。麻布大学の学生を中心に各校の学生が多く、北海道から中国地方まで全国から約 120 名の参加があった。

各地の保護活動をしている獣医師等が、救護、診療、飼育そして放鳥獣について講演をした。森田正治先生は、今までの実習の参加数は大学別の参加など話された。

私は WRV が今までのカルテ集計や都道府県アンケートをもとに日本の傷病野生動物救護における行政面の厳しい現実や多難な将来について話をした。他の先生方の動物愛護や動物福祉と違う視点であったため、少しショッキングな内容であったと思う。しかし、動物愛護のみでは野生動物救護活動は出来ないので、生物多様性の保全として保護と管理（処分）を十分理解したうえでの救護活動が大切だということを述べた。

講師の方々は、滋賀県からは動物病院、宮城からは NPO 野生動物保護センター、この 2 名は獣医師でないが動物愛護を基に活動している。千葉からは動物病院院長で WRV の会員でもある金坂先生、山梨からは県の野生動物保護センターの所長である。環境教育に力を入れている。神奈川からは NPO の野生動物救護センターで WRV 理事の皆川先生が講演を行った。皆川先生は、「なぜ神奈川県が日本一の保護数であるのか」と話題を出すと共に、リハビリテーターの養成について話された。

私は森田先生から座長兼司会者というような進行係を受け、はじめに各講師の追加発言を求めた後、参加者よりなるべく多くの質問を引き出した。盛況の内に時間も大幅に延長してから森田先生の挨拶で閉会をした。懇親会にも、講師はじめ多くの方々が参加した。森田先生より、各地に NPO の救護センターが出来てきたので、その連絡網を作り、よりよい救護活動ができてればという提案があった。WRV としても前向きに検討する必要があると思われた。

左下：森田正治先生、武田修先生、
金坂裕先生、皆川康雄先生、
池田幸先生、上野剛文先生
左上：須田沖夫先生

神奈川県野生動物リハビリテーター“ロゴマーク”の紹介

理事　皆川康雄

“野生動物リハビリテーター”当然ながらまだまだなじみの薄い言葉です。神奈川県では、現在 85 名の野生動物リハビリテーターが活躍していますが、今後リハビリテーターが街中でのレスキュー活動をするにあたり、資格者として野生動物を扱っていることを市民にわかってもらうために名刺や腕章などが必要になります。その際、リハビリテーターとわかるようなロゴマークが必須です。さらに、印刷物や広報活動などに利用することで、リハビリテーターの認知度を上げることに役立ちます。そして、それはリハビリテーター自身の自覚にもつながると考えます。

そこで、リハビリテーターのみなさんにロゴマークのイメージやアイデアを持ち寄って決めていただきました。まさに、リハビリテーターによるリハビリテーターのための最初の共同作業となりました。それぞれの思いが詰まったものばかりでしたが、そのなかから、もっともリハビリテーター活動を象徴するかたちということで、『放鳥シーン』が採用されました。

それは、今まさに私たちの手から大空へ飛び立つ鳥をイメージしています。（図参照）ロゴは神奈川県野生動物リハビリテーター（Kanagawa Wildlife Rehabilitator）の頭文字（KWR）と目のイメージです。目は、生き物の目、自然を見つめる目、未来を見つめる目を表しています。

こうして完成したロゴマークは、現在リハビリテーター認定証をはじめ、名刺や普及用印刷物に活用されています。このロゴマークを目にした方が、野生動物を扱う資格者“野生動物リハビリテーター”を知るとともに、野生動物救護を考えるきっかけになっていただければと期待しています。

図：放鳥シーンをイメージした神奈川県野生動物リハビリテーターのロゴマーク

08年　カラス調査　中間報告

WRV 理事　須田　沖夫

カラスは全国的に有害鳥として駆除されています。行政によっては傷病鳥救護から除外しています。今年度、日野自動車グリーンファンドからカラス羽毛検査に助成金をいただくことが出来ました。

カラスは体重、嘴の長さ、頭長、血液、羽毛などを検査します。現在までに東京 33 羽、北海道 17 羽、山形 17 羽を調査しました。

調査の結果、体重では山形県が重く、血液検査では PCV は北海道のハシブトと ALT、AST は東京と山形のハシブトが低い。Tcho は北海道が低く、P は北海道が高いなどが認められ、K は検査時間によって変動が見られる様であるが、まだ調査個体数が少ないので、はっきりしたことは解らない。今後継続した検査が必要である。

08 年 9 月～10 月（地域、分類別平均）

	全体	ハシブト	ハシボソ	東京 ハシブト	北海道 ハシブト	北海道 ハシボソ	山形 ハシブト	山形 ハシボソ
調査数（羽）	68	52	16	34	12	5	6	11
体重（ｇ）	664	645	647	626	630	450	773	734
嘴長さ（㎜）	63.1	65.9	47.5	66.4	64.4	46.7	－	－
頭長（㎜）	111.9	113.2	98	112.9	113.4	98	－	－
PCV（%）	41	41	44	40	47	40	40	47
TP（g/dl）	3.7	3.6	3.7	3.7	3.5	3.4	3.6	3.8
Alb（g/dl）	1.4	1.3	1.5	1.3	1.2	1.5	1.4	1.5
Glob（g/dl）	2.3	2.3	2.2	2.4	2.2	2.1	2.1	2.2
Glu(mg/dl)	273	280	258	300	229	234	255	276
BUN(mg/dl)	5.8	5.5	6	5.4	6	5.3	5.8	6.1
NH3（μg/dl）	368	331	539	331	－	－	－	539
Crea(mg/dl)	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ALT（IU/l）	187	148	250	131	222	295	104	213
AST（IU/l）	736	667	1069	565	1115	1122	371	1131
ALP（IU/l）	107	107	97	113	115	119	52	85
GGT(IU/l)	11.7	9.2	19.2	8.1	8.1	7.3	15.5	27
T-bill（g/dl）	0.5	0.5	0.9	0.2	0.6	0.3	1	1.2
AMYL(IU/l)	1365	1415	1214	1619	1159	1453	1002	1057
Lipa（IU/l）	367	263	496	175	590	634	163	398
Tcho(mg/dl)	164	171	141	196	120	116	134	156
TRIG(mg/dl)	110	112	97	114	101	104	117	93
URIC(mg/dl)	9.3	9.2	8.9	10.7	7.2	11	－	－
CPK（IU/l）	1222	1222	>2036	1222	－	－	－	>2036
P(mg/dl)	4.1	3.6	5.3	1.4	10	9.2	2.4	3.7
Ca(mEq/l)	8.5	8.6	7.9	8.7	8.8	8.1	8.0	7.8
Na(mEq/l)	159	160	152	163	154	153	154	148
K(mEq/l)	5.1	4.4	8.3	2.5	7.8	7	6.9	9
Cl(mEq/l)	128	129	124	131	123	124	126	124

事務局より寄付のお礼

寄付ご協力者（敬称略）2008 年 9 月 1 日～2008 年 11 月 30 日

＜一般＞本多紗英 ハガキ 100 枚　　＜人災募金＞10.1 福本美砂恵　4,000

9.30 牛浜ペットクリニック（募金箱）93,184

事務局日誌　2008.9.26～2008.12.25

－－－9 月－－－

28：東京港野鳥公園　油汚染対策講習会　WRV 共催　　対応：新妻・野村・馬場

－－－10 月－－－

2：瑞穂町　カラス調査（CIC　25 羽）、　　対応：須田・佐藤(美)、野村(ｱｶﾃﾞﾐｰ)

4：動物感謝デー（東京）日本獣医師会主催　　対応：小松・須田

20,21：環境省　第 1 回油等汚染事故対策水鳥救護研修　　対応：新妻・馬場・皆川・大窪・　箕輪・須田

20：鳥ポックスウイルス症　ＴＶ取材（フジテレビ）　　対応：新妻・須田

22：馬場先生ＴＶ取材協力（日本テレビ）　　対応：須田

24：東京都サポーター講習会（第 1 回）　　対応：野村・佐藤(美)

27：第 10 回 WRV 理事会

30：助成金申請サントリー（本の出版）、日本財団（油汚染専門家育成）対応：須田・箕輪

－－－11 月－－－

5：P&G 打ち合わせ　　対応：野村、須田、佐藤、箕輪

13：カラスのミネラル分析依頼（ら・べるびぃ）　　対応：須田

14～16：第 29 回動物臨床医学年次大会（動臨研）　　対応：新妻・須田

15：日野自動車グリーンファンド助成金授与式　　対応：須田・箕輪

18：第 11 回 WRV 理事会

23：第 5 回野生動物保護セミナーin 関東　講師派遣　　対応：皆川・須田

24：東京都サポーター講習会（第 2 回）　　対応：野村・佐藤(美)

－－－12 月－－－

4,5：環境省　第 2 回油等汚染事故対策水鳥救護研修　　対応：新妻・馬場・皆川・大窪・中津・箕輪・須田

9：愛鳥懇話会（鳥類保護連盟主催）　　対応：新妻・箕輪

12：カラス採血（多摩動物園吉原先生と）　　対応：須田

15：日本獣医生命科学大学　獣医保健看護学科　油汚染鳥救護実習　　対応：梶ヶ谷・須田・箕輪

15：森田正治先生と打ち合わせ　　対応：須田

17：第 12 回 WRV 理事会

26：ニュースレターNo.67 発行　　対応：須田

野生動物救護獣医師協会　(ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ) **http://www.wrvj.org/　(E-mail) kyugo@wrvj.org**

NEWS LETTER No. 67　2008. 12.26 発行

発　行：特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会

事務局：　〒190-0013　東京都立川市富士見町 1-23-16 富士ﾊﾟｰｸﾋﾞﾙ 302

TEL: 042-529-1279　FAX: 042-526-2556

発行人：新妻　勲夫　　編集文責：須田　沖夫